

## 詩的想像と社会科学論

J・S・ミルの論理学形成過程に占める詩論の位置

升 信夫

- 一 初期ミルの思想的状況
- 二 詩論
- 三 社会科学論の形成

『自由論』が著されたのは一八五九年。この時、イタリアは国家形成を目前にし、ドイツもそれに続こうとしていた。ミルも『代議政治論』で触れていることだが、世紀前半のナシヨナリズムが展開し、民族が政治的主体としてくつきりと姿を現し始めたのである。すでに国家形成を遂げて久しい国では、こうした動向に應ずるようには、国民国家への脱皮が計られる。イギリスでは、伝統権力を少しずつ崩しながら国家権力の浸透が徐々に進行し、いままさに参加が焦眉の問題となっていた。そうしたさなかにあつては、一般に順応よりも無秩序こそが危惧すべきことと考えられたのももつともなことといえる。『自由論』の根底には懷疑主義があると受けとめられ、人間は信仰がなければ生きて

ゆけず、懷疑主義の不確かな土台には堅牢な建物は建たないと批判された<sup>1)</sup>。穀物法撤廃に象徴される経済的意味での自由主義の時代が到来したといえても、信教、思想、言論等の精神活動での自由は今思うほど十分には実現されていない。そうした状況でミルが『自由論』を著し、精神的活動での広範囲に及ぶ自由を求めたのは、それが知識の前進、進歩を最も確実に生み出すと考えたからである。そもそも人間の知性、徳性の前進、人間の完成可能性の達成が、ミルの諸著作を貫くテーマであった。政治への参加は公共精神を涵養する目的でなされ、自由は、私的領域で隠れて享受すべきものというよりも、知性、徳性の前進をはかる手段として位置づけられたのである。それならば、知識のあり方をミルがどのように理解していたか、つまりその認識論や論理学の構造は、ミルの思想を説明、評価、批判する重要な鍵となるに違いない。

こうした観点に立つとき興味深く思われるのは、『自伝』でミルが、「生き生きと把握された観念が引き起こす想像的情绪は、決して幻影ではなく、その対象の持つ他のいかなる性質にもまさるとも劣らない現実性を持つ一つの事実である」と述べ、さらに夕日に照らされる雲の美しさを思うことと、雲が水蒸気から出来ていると知るとは矛盾するものでないと論じ、詩的感性による対象理解と科学的分析とを同等の地位においている点である<sup>2)</sup>。詩的想像力の意義付けは、いわゆる「精神の危機」以降のロマン主義との出会いの結果もたらされたものであるが、では実際、詩的感性による把握と、科学的分析とが、親和的に併存するものなのかということになると、ハイエク以来、多くの論者はこれを否定的に捉えている。確かに、ミルが『論理学体系』で示したのは、超越論的哲学でも、絶対的観念論でもなく、経験論の枠に従いながら、演繹法と帰納法の優れた点をミックスしようというものだった。この書でヒュームに做う感覚主義(sensationalism)と、ハートリー以来の聯想心理学を手がかりとして、コントに類似する実証主義、或いは現象主義(phenomenalism)が説かれていることは古くからの了解事項でもある<sup>3)</sup>。そして、こうした枠組みで詩的

感性による対象把握をリアリティを持つものとして基礎づけることには無理があるように思える。それならば、なぜ、先のような自伝での記述が生まれたのだろう。そして、それらはミルの中ではどのように整理されていたのか。これらのことを、初期ミルの思想的変化の中に探り、詩的想像がミルの社会科学論で占める位置について確認する。<sup>1)</sup>

## 一 初期ミルの思想的状況

外界の事物、感覚、単純観念、複雑観念という過程を通じて認識に到達するというのがロック以来の英国経験論の基本的構図であった。ロックは、外界の物体の存在を前提とし、物体に一次性質を帰属させる。それが、ヒュームに至り、精神、外界の事物は実体としての存在を否定されてしまう。眼前の机を叩き、机と断言しないまでもここに何かあるのは確かだ、と叫んだところでヒュームは、それは触覚から得られた感覚、叩かれた音という聴覚情報、そして色等が、経験的に集合したものにすぎず、感覚以前に何かがあるとは断言できないと答えるだろう。経験的に構成される共同幻想的世界こそ、人間的世界なのだ。これに対して、リード、ステュアートらによる常識哲学は、経験論が観念を媒介としてしか究極的真实を掴むことは出来ないしてきたことを退け、究極的真实は直接的に掴むことが出来ると論じ、日常的世界の実在性を説いた。

父ミルは、常識哲学の支配するスコットランドで教育を受け、ハートリーの聯想心理学に依りながら功利主義を掲げるようになっていく。彼の実体、外界の存在等に対する姿勢は必ずしも明確ではないが、基本的にはハートリーの唯物論を継承したと考えてさしつかえないだろう。実際、『人間精神現象の分析』では、経験に先立つ外界の存在は否定されてはおらず、例えば、ある物体(certain bodies)が振動し、その振動が空気により媒介され耳に伝えられ聴覚に

なると論じられており、感覚に先立つ物体が想定されている<sup>5)</sup>。初期教育段階でのミルは、父ミルのこうした枠組みを継承したと考えられる。例えば、一八二〇年から二一年に著された「論理学概論」では、「我々の観念の源は外界の物体である」とした上で、五感のある部分に欠損が生じた人間の観念がどのようになるか検討し、観念は感覚を通じて形成されると論じている<sup>6)</sup>。また、ロック、エルヴェシウス等を通じて、心理学、認識論を学んだのであれば、外界の事物は当然のように前提とされただろう。勿論その事物は、物自体などの価値的源泉ではなく、ホップズの唯物論の延長上に理解できるものである。さらにこのことは、ミル論理学の構成要素である感覚主義、聯想主義、実証主義の中で、感覚主義が徹底されず、実証主義が確立していないことを意味する。

ところで、『自伝』によれば、一八二六年から二七年にかけてミルは、人生の目的を見出だすことができな<sup>7)</sup>と思<sup>8)</sup>い悩み、暗澹たる日々を送るようになった。いわゆる「精神の危機」である。こうした経験を経たことが契機となつてミルは、二〇年代終わりにコールリッジ、ワーズワースの詩作品に親しむようになり、三一年には、カーライルとも親密な関係を結ぶようになる。湖沼派の詩人たちは自然の神秘と美しさをうたう。ではそれは、経験的に確かなものといえるのか、詩人の空想から生み出された言葉の遊びではないのか。三三年初頭、ミルは科学的分析を外界の客観的分析に、芸術的感性を内面世界の描写にそれぞれ割り振っていた。これでは詩的想像は、ある種の慰みにすぎず、「現実性を持つ一つの事実」などにはならない。

そして確かに、この時期のミルの主たる著作活動は論理的探求に関わるものであり、新聞記事や討論会での発言を除くと、ロマン主義についての纏まった評論は著されていない。ミルは、論理的探求を、それと異質なロマン主義的世界理解があることを念頭に置きつつ行つたにとどまる<sup>9)</sup>。例えば、名辞に関わる論理学的考察である「政治用語の効用と弊害」(一八三二)では、推論能力は、詩的想像力を犠牲にして涵養されるものではないと論じられているものの、

両者の関係については、「これまで相互に争ってきた全ての半真理を統一し、それらを合わせて一つの調和的な統一を生み出す」という漠然とした目標が持たれたにとどまっていた。<sup>8)</sup>

ところが、三三年夏頃ミルは、内面世界、客観世界という常識的区分を脱し、自然科学と芸術的感性は周囲の世界を探索する手段として同じ次元にあるものと指定するようになる。つまり、詩的想像の内面の描写から「現実性を持つ一つの事実」というべきものに転換されたのである。先ず詩論での論理の変化をたどりつつ、こうした転換がどのような過程を経て生まれたのか確認しよう。

## 二 詩論

二〇年代終盤よりミルは、自らの感情を慈しむべく詩作品への愛着を深めた。既に、一八二九年の討論会で「ワーズワースとバイロン」と題する討論を行い、また三〇年代に入り若干の評論を新聞雑誌に掲載している。そうしたミルが、詩の様態について、それなりに纏まった議論を試みたのは、一八三二年を過ぎる頃からであり、翌年三三年一月『マンスリーレポジトリイ誌』に、「詩とは何か」を掲載し、その続編として、同年一〇月に「二種類の詩」を寄稿している。更に、三五年七月には、『ロンドンレビュー誌』に「テニソンの詩」を掲載することになる。こうした詩についての思索にミルは一時期大きな意義を認め、三二年一二月には、「政治についてこれまで私が書き著した全ての論考よりも、遙かに高級で、価値があるものを目指した」とカーライルに書き送っていた。<sup>9)</sup>但し、これらの論考は必ずしも一貫した趣旨を備えたわけではなく、そこに三〇年代のミルの、感情と分析的論理の意義付けを巡る思想的揺れが端的に示されている。<sup>10)</sup>

「詩とは何か」でミルは、先ず、詩と科学を対照させ、詩が感受性 (feelings) に訴えかけるのに対して、科学は観念 (belief) に訴えるとしたワーズワースの議論を検討する。ミルによれば、この定義は、詩と科学の差異を述べるには有効であつても、例えば、小説 (fictional narratives) も感受性に作用することを勘案すると、詩についての必要十分な定義とはならない。そこでミルは、催される情動の様態に着目し、小説が外界の状況を扱うことで情動を生み出すのに対して、詩は内面的感情を素材として情動を促すという差異を仮設的に示す。しかしこの基準も、詩とそれに類似する雄弁 (eloquence) とを適確に類別せず、ミルには未だ十分なものとはならない。詩は孤独な心の表現であるのに対して、雄弁は、聞き手を常に想定し、その聞き手の感情を動かし、行動に駆り立てることを目的とするのである。

こうした議論を通じ、ミルは様々な角度から詩の特性を明らかにしようとする。しかしながら、その立論は、想像と空想 (fancy)、詩と雄弁など、いわば借り物の言葉によりなされ、そのために必ずしも鮮明なものではなくなっている。ただその議論に通底しているのは、詩をあくまで内面的感情にのみ関わらせようとする姿勢であろう。今仮に、夜深き高みから都市を臨み、それについて語るよう指示され、詩人が、街路や建造物に連なり揺れる明りに、暖かくもある寂寞感を覚え、またその広がりの大いさを強く印象にとどめ、そうした言葉で都市について語ったとしよう。三三年一月のミルは、そのような都市の像は人間の内面にのみ存在するものであり、都市の客観的理解は、語り手の置かれた環境に由来する情動を意識して押さえ、人口、財政、交通等々を述語としてしか語ることはできないと判断したに違いない。つまりこの時のミルは、外界の物質的世界と、それを規定する法則性を疑い得ないものとし、それらは人間の内面から独立して存在すると考えている。例えば、物の落下が重力の法則に従い生じ、物の燃焼がそれを構成する分子の酸化作用の表現であるように、真理は、reality として、見た目の世界 (appearance) の背後に存在するとミルは理解していた。つまりミルは、詩を幻想と退ける従来の功利主義の世界了解の枠組みから抜け出てはいな

かった。

周囲の外界が客観的構成を持つということをも相対化するイメージ操作ができないならば、その世界は「精神の危機」以降の疎遠さを持続して持つことになる。<sup>14</sup> そのため周囲の世界との感情的交通は依然として閉ざされたままとなり、結果として聞き手との同感が「雄弁」として否定的に理解され、詩はあくまで独白だと論じられたのである。<sup>15</sup>

こうして「詩とは何か」では、論理的探求と詩的感性は、依然として異なる領域に属すものとされていたが、三三年四月の「ジュニウス・レディヴィヴスの著作」(I)では、やや微妙な表現が用いられている。そこでミルは、十全な諸前提を得てはじめて推論は意味を持つが、その諸前提自体は推論により得られるものではないと述べつつ、その諸前提を、諸原理、諸事実、望ましい目的と置き換えている。<sup>16</sup> そしてミルは、これら推論を補完するものを詩的感性に関わらせ、「美的感覚が欠乏したり脆弱なものにとどまる場合には、理解力も萎縮せざるを得ない」と論じる。<sup>17</sup>

このことは、この世界を理解する手段として、詩的感性の意義付けが計られた結果、論理的探求の領域が限定付けられるようになったことを示唆している。この薔薇は美しいと歌う詩を真実と関わらせるには、薔薇を植物として客体化する日常的意識が限界付けられなければならないのである。こうして、それまで内面と外界という区分に対応させられていた詩的感性と論理的探求は、外界の探求手段として、同一の地平に置かれることになる。<sup>18</sup> だとすれば、詩的感性と論理的分析が、外界とそれぞれのように関わるかが問われねばならず、また詩の意義付けは、「詩とは何か」とは異なるものになる筈である。実際、三三年一〇月の「二種類の詩」は、こうした変化を反映するものとなっている。

「二種類の詩」でミルは、聯想心理学に拠りながら、先ず詩人の意識の成り立ちを、科学者や実業家のそれと対照させ、「科学者、実業家の場合、考えたり行動したりするのに便利が良いように自ずから頭の中で形作られる人為的な

類別に従い、外界の対象は纏められる」が、詩人の場合は、天性の強い感情を持つがゆえに、「対象とその観念とが情動により結合され、対象と観念の間に情動が介在することになる」と指摘する<sup>19)</sup>。ミルによれば、詩人の場合、媒介となる感情の類似性により複雑観念(groups of thoughts or images)が形成されるので、ある複雑観念を想起する時には、必ず情動が促されるのである。聯想心理学の立論に従えば、人間は複雑観念を介して周囲の世界を認識する。従って、観念の様態を異にする詩人と実業家は、異なる世界理解を備えることになる。例えば今、一塊の石炭を前にしているとしよう。詩人は、その艶に囚われつつ太古の生命に心を馳せ、また炎の像を経て、光と闇を思うかもしれない。それに対して実業家は、それがどの地方で産出され、どれ程の価格であるのか知りたいと思うかもしれない。このようにして、詩人と実業家は、周囲に置かれる様々な事物に対し、異なる思いと情感を対応させ、その異なる思いと情感を縫い合わせてできる異なる世界に暮らすことになる。

以前のミルは、外界についての情報は感覚器官を通じて得るものだけであると認めながらも、その感覚主義はヒュームほど徹底したものではなかった。そのため外界の実在性は疑われず、自然科学は外観の背後にある reality を明らかにするものであり、その reality が外界の客観的構成であると想定されていた。ところがこの時、詩的想像を価値づける過程で感覚主義の構図が鮮明になる。そして、先ず外界とその写像である観念の世界が、ミルの意識の中で明確に分離され、その両者は自然科学の論理で一元化できるような固定された関数関係にはない、或いはそもそも外界の存在を論証することは出来ないと考えられるようになった。この時、かつて万人に等しく分節化されるべきであると想定された客観的な外界は姿を消す。もしそれを無理にでもイメージしようとするれば茫漠とした像が浮かび上がるにすぎない。詩人も、科学者も、実業家も、それぞれの方法で、世界を分節化し、暮らしているのであり、世界は様々な豊かな表情を見せるのである。それならば、夕日に照らされる雲の美しさも現実性を持つ一つの事実になるに違いな



い。この「二種類の詩」が準備されていた夏にしたためられたカーライル宛て書簡でミルは、周囲の人々を見、また様々な感情に襲われる中で、realityとは何か考えて行こうとする境地が開けたという趣旨を述べ、先に出した詩論は不十分なものであり、更に前進させたものを書き示す予定である旨伝えている。そして「この間、表立って著したものはありませんが、私の中では大きな変化がありました」と述べている。<sup>20</sup>『論理学体系』でミルは、知覚を生み出す外界を「何か不可思議なもの(the mysterious something)」と呼んでいるが、三三年の草稿段階では、そうした表現は見当たらない。<sup>21</sup>この書簡に見られる、やや不分明なりアリティという表現こそ、後に「何か不可思議なもの」と呼びならわされることになる、周囲に広がる未分化な世界イメージにミルが与えた名辞であったに違いない。そして、ロマン主義の詩を価値づける過程で到達した境地であるだけに、その未分化な世界は、仮に一時的にせよ、物自体(noumenon)とも関わるような価値を与えられていたと考えられる。

その世界を前に、ミルはその真理を掴みたいと考える。そしてミルには、様々な世界の分節様式の中で、詩人たちのそれが真理に最も近い存在に思えた。同じカーライル宛て書簡でミルは、「殆どの高級な真理は直観的に得られるものであり」、「詩人や芸術家が主に関わるのはそうした真理(the truth)であり、彼等の職務は、その真理を謳い、人々の心に残るようにすることです」と記している。<sup>22</sup>かたくなな客観性を持つように見えた周囲の世界が、未分化なものに還元され、その世界を探索する手段として感情が意義づけられる時、かつて行き場を失い浮遊した感情は、周囲の世界と融和する。

こうした心理過程に「二種類の詩」を位置付けるならば、その後半部で力説されている詩人の詩と教養人の詩という類別は興味深い。ミルによれば、教養人の詩が、いかに感情を賛美しようとして、ある思考(thought)を謳うことになるのに対して、詩人の詩は、思考を媒介として感情を表現する。そして、この類別は敷衍され、詩人にも、教養人の詩

のように思考を表現する「修養の詩人」と、感情を謳う「天性の詩人」とが存在すると論じられ、その典型として、それぞれワーズワースとシェリーが挙げられる。この感情と思考との対比は、カーライルとの書簡のやり取りの中でも用いられている。その中で、カーライルはミルに思考でなく感情を語るように求め、ミルはそれが自分には容易でないことを詫びている。<sup>25</sup>そこから推察すると、思考そして教養の詩は、論理性、及び政治的思惟と親和性を持つものであったと考えることができる。世界の不思議さを垣間見たミルは、一時的にせよ、人間的事象の彼方にある真理を見極めることにより大きな魅力を感じたのである。<sup>26</sup>

こうして三三年、ミルの前に探求心をそそのかす空間が眼前に開けた。その空間は、詩的想像の意義付けと感覚主義の構図の鮮明化を契機として開けたものであったが、ひとたびその空間が開けると、ミルは、その空間を、直感や「理性」によるのでなく、経験論の論理を鍛えることで探求しなければならぬと考えるようになる。つまり、再び融和から対象化へのモメントが生じる。その変化は急速であった。既に三三年、七月のカーライル宛て書簡には、真理を知る者に、それを伝えることと、知らぬ者に理解させることとは全く異なるのであり、後者は論理学者の職務であると述べていた。<sup>27</sup>そして三三年と、翌三四年には、「論理学体系」の草稿の三分の一が完成に導かれる。そうした論理的探求、或いは対象化が進めば、詩の意義付けにも当然変化が生じるだろう。詩的想像に現実性を付与する基盤は危ういものとなる。実際、翌年三四年八月のニコル宛て書簡では、三三年の詩論は誤ってはいないとしても、掘り下げ方が足らず、「この問題についてより多くのことを書く用意がある」と述べている。<sup>28</sup>その現れである一八三五年七月の「テニソンの詩」を、引き続き見てみよう。

そこでミルは、真の詩人は必ず二つの性質を持つとして、天性の要素と修練の要素を挙げる。天性の要素は、欲びや苦しみを人に増して鋭敏に、持続して感ずる感覚能力であり、修練の要素は、日常的に持つ観念、感情の様態にと

のような方向性を与えるかに関わるものであった。つまり、天性の要素は感受性に関わり、修練の要素は思考(thoughts)に関わる。こうして、かつて「二種類の詩」で、詩の類別基準とされた天性の要素と修練の要素は、この「テニソンの詩」では、詩を優れたものにする構成要素に転換されている。更にそれだけでなく、ミルは、優れた詩人は、観察し、分析し、反省し、一般化する一連の作業から得られる思考に満たされると述べ、むしろ、修練の要素が重要であると論じたのである。この結果、「二種類の詩」で高く評価されたシェリーは、天性の要素が過剰であり、思考との平衡を失し、一部の人間を除いて同感することができないとして、否定的に評価されるようになる。また、ここで、シェリーを否定的に評価する行論で、それに同感できないということが根拠として用いられていることは興味深い。かつて「詩とは何か」では、詩は独白であるとされ、人々の相互交流である同感<sup>8</sup>は、雄弁と等置され、否定的に捉えられていた。それに対して、この「テニソンの詩」で、詩は同感を通じて、人々に共有されるべきものと考えられたのである。

こうしてミルは、三三年「詩とは何か」「二種類の詩」、三五年「テニソンの詩」と考え方を修正し、最終的には、周囲の事象を鋭敏に感受し、それを思考により主体的に捉え直すという二つの作業を行うことが対象の論理的把握には不可欠であると考えようになった。では、詩論と同時に進行していた『論理学体系』の執筆では、そうした変化はどのように反映されたのだろうか。<sup>9</sup>

### 三 社会科学論の形成

『自伝』によると、ミルは一八三〇年の初め頃、論理学についての思索をまとめる仕事に着手し、それを『論理学

体系』の礎石としたらしい。<sup>29)</sup>そして、まず三段論法について纏めたが、帰納法の部分で書き続けることが困難となり、自然科学の全領域についての包括的な解明が必要と感じ執筆を中断する。<sup>30)</sup>その後、一八三七年ヒューエルの『帰納法の歴史』に接したことを契機に作業は再開され、三九年までに全体の原稿ができ、その後の一部の手直しを経た後、四三年に出版となった。『自伝』のある箇所では、この中断について、三二年から三七年であると記され、また別の箇所でも五年間の中断の後、三七年に再開したと述べられている。<sup>31)</sup>しかし、残存している草稿、そして草稿に言及された書簡を検討すると、ミルのこの記述は正確さを欠いているようである。

残存している草稿は、三種類の筆跡からなり、それぞれにミル自身の朱が入っている。ミル著作集の編者でもあるロブソンはこれらを検討して、草稿は、それぞれ三三年、三四年、三六年に書かれたものと推測し、『論理学体系』全六巻のうち一、二、三巻はほぼ三四年までに完成されていたと断定している。<sup>32)</sup>そして、『論理学体系』は、三分の一が三四年までに、帰納法の分類等の三分の一が三七年に、第六巻社会科学論等の三分の一が三九年から四〇年にかけて著されたとされる。

とはいえ、『自伝』の記述は、全くの誤りであるとも決め付け難い。三二年から三七年という記述がミルの記憶違いであるとしても、『論理学体系』の執筆過程で、中断があり、それがミルの思想的展開の中でなんらかの意味を持っていたからこそ、『自伝』の記述が生まれたと考えられるからである。では、その中断とはいつの頃のことか、またどのような意義を持っていたのだろうか。そのことに注目するならば『論理学体系』の社会科学論が持つ一つの特徴が明らかになる。

ミルは、初期教育の過程で論理学の基礎的な訓練を受け、一八二〇から二一年には論理学の概論書をスケッチして

いる。その後、一八二五年に幾人かと勉強会を始め、論理学も討論の対象とするようになる。「自伝」の記述によれば、その過程でミルは三段論法の演繹的推論が論証過程として有効なものであるとしても、それが新たな真実の発見をもたらすかについて疑念を抱くようになっていた。一八二八年一月の「ホエートリーの論理学」は、そうした問題意識を表現したものであり、そこでミルは、論理学の利用価値、帰納法と三段論法との関わり等々について議論を展開している。その翌年一八二九年、マコーリーのJ・ミル批判が現れる。マコーリーは、人々の社会的行動は、快苦の感覚だけから説明することはできないとして、J・ミルの演繹的方法を批判し、帰納的方法を推奨した。この時ミルは、功利主義の論理を半真理と見做し、なんらかの形でそれを修正し、より説得的なものとしてしようと考えている。マコーリーの立論は、そうしたミルの関心を、強く刺激するものであった。そこでミルは、この問題に何らかの解答を与えるべく、三〇年から三一年にかけて、「経済学の定義」と、『論理学体系』の一部に繋がる草稿を書きとめることとなる。<sup>33</sup>

ここでミルは、社会科学(moral sciences)と自然科学(physical sciences)の違いについて、自然科学が物体の法則(Laws of matter)とそれに依存する現象を扱うのに対し、社会科学は精神の法則とそれにかかわる現象を扱うとする。そして、それぞれの科学について現象を構成する基本的諸要素についての真実は帰納的のみ得られるが、その基本要素がどのように複合して機能するかについては演繹的推論が必要であるという考え方を示す。そして、複雑な社会現象の解明には、帰納と演繹の両方法を適確に連携させて用いる必要があると理解していた。例えば、その頃に書き表わされた「時代の精神」(三一年一月より連載)では、演繹的方法と帰納的方法との融合が説かれている。とはいえ、二つの方法の連携が考えられていたとしても、ミルのこの時の関心は、演繹的推論の様態に主に向けられていたといつて良いだろう。ミルには帰納法を考察して行くための条件がまだ整っておらず、この三〇年前後の、社会的現象を論

理的に分析する方法の模索は、基本的に、初期教育で得た知識の延長上に構想されていたのである。

この論理的探求の傍らでミルは、前節で指摘したように、その探求とは必ずしも親和的でないロマン主義への関心を深めている。そうした状況で迎えた三三年は、ミルにとり画期的な年であった。詩論の考究を深めて行く過程でミルは外界についての日常的感觉を相対化し、未分化な世界像を抱くようになる。このことは自然的現象も、社会的現象も、外界に関わる事象が、かつての確かさを失うことを意味した。カーライル宛て書簡からも窺えるように、ミルはその世界を自分の論理的言葉で解明したいと思ひ、「経済学の定義」の手直しをすると同時に、『論理学体系』の執筆に力を注いだのである。<sup>(55)</sup>

ここで外界について知ることができるのは、感覚器官を通じて得る情報のみであり、「物体の知覚できる諸特性と私達と呼んでいるものが、物体自体の性質に類似していると信ずるに足る理由はいささかもない」ことになる。<sup>(56)</sup> 未分化な外界を Realities と置くとき、それについての知識は、知覚に基づき形成する諸観念以外からは得ることができない。このように考えるのであれば、不確かに流動する感覚情報からいかにして確かな法則的知識にたどり着くかが興味深い問題となる。自然科学であれば、経験情報だけを頼りとして物体の基本的法則にいかにして到達出来るかが、複雑な現象の解明に先立つ課題となる。つまり、帰納法の確立が第一に解決すべき事柄となる。では、精神の法則が関わりとされた領域はどうだろうか。

人々に目を転じてみるならば、自分の持つ諸観念の集合体を世界として対象化し、考え、行動している人間の姿が目に入るようになる。私にとっての Realities が写し取られた私の観念の中にしかないように、周囲の人々にとっての Realities も、その観念の中にしかない。その時、この人間の社会が、人々の持つ個人的、共同的な諸観念を中心に構成されていることが鮮明に実感できるようになり、またその観念の集合に重みを認めることになる。美意識、道徳観

念などの諸観念は内面に秘められるべきものではなく、實在化され、対象化される。そして人間社会の解明は、その人々それらなるの Realities のありようである諸観念を解明することを通じて果たされねばならない。三四年以降、ミルは、reality の語義を変え、その諸観念を中心に構成される社会的諸現象を realities と呼ぶようになる。例えば、三四年一月のカーライル宛て書簡でミルは、以前の功利主義者達の望みは、actual realities に触れることで修正されていたが、自分は一つの reality も知らなかつたと述べている<sup>(38)</sup>。そして四月にも、「私は以前にも増して、抽象観念ではなく、realities について見聞を深め」たと述べ、ロンドンはこの国のどの場所にも増して「多くの realities を知り、またそれと関わる事ができる」と書き送っている<sup>(39)</sup>。更に、四〇年の「トックヴィル論（II）」では、民主主義という現象は、「自然的に實在するもの（a reality）であり、単なる数学的、形而上学的抽象物ではないので、無数の特性を示す」と論じている<sup>(40)</sup>。では、そうした realities は、どのようにして論理的に探求、把握できるのだろうか。それには、人々が抱く観念は、検証の手段の位置に置かれるのではなく、探求の起点に据えねばならない筈である。つまり自然科学だけでなく、社会科学においても帰納法が先立たなければならぬ筈である。だが「経済学の定義」の段階ではそれが果たされていなかつた。そのため、『論理学体系』の執筆は、名辞と命題の次に検討すべき科学的方法論の確定の部分に至るならば、限界にあたる筈である。実際、三三、三四年の草稿以降、三七年に至るまで、『論理学体系』の執筆は大きな前進を見ていない。こうした事情を考慮すると、ミルが『自伝』で述べている、『論理学体系』執筆の中断は、三三年夏に得た着想に基づき「名辞と命題」等を書き終えた三三、三四年と、三七年に再開されるまでの期間を指しているものと推測できる。執筆の中断は、『自伝』の記述通り、自己の問題意識を適確に収める帰納的方法を確立できなかったために生じたものであつた。

前節で触れたように、三五年七月の「テニソンの詩」でミルは、眞実を掴むには、周囲の事象から意味のあるもの

を鋭敏に感じ取る能力と、感取した素材に能動的に働きかけ、それを再構成する能力とが必要であることを力説していた。この「テニソンの詩」に続きミルは、一〇月に「トックヴィル論」(I)、翌三六年一月に「アメリカの社会状態」、四月に「文明」を著している。これらは、いずれもトックヴィルの『アメリカの民主主義』に啓発を受け、民主主義化が生む様々な結果について考察した論考であるが、それらの間には微妙なニュアンスの差異を認めることができる。これらの一連の論考を通じミルは、時間を経るに従い、民主主義化の結果、人々がどのような感情、思考様式を備えるようになるかに、より多くの紙幅を割くようになっていく。ミルは、トックヴィルの立論が、自分が求めている帰納的方法に従い、人々の感情の様態を規定する因果性を見事に説き明かした実例であると徐々に確信するようになったのである。実際に、『自伝』を著した時点でもミルは、トックヴィルの書物を、帰納的方法に傾斜したもので考えていた。<sup>44)</sup>

こうして帰納法の確立を目指していた時、ミルは、一八三七年ヒューエルの『帰納法の歴史』に出会う。そしてこの書物に触発されて、ミルは再び一気加勢に、一致法、差異法等の帰納法の一般的方法を規定し、『論理学体系』の三分の一にあたる部分の草稿を完成させた。

但し、これらの準則は実験が可能な自然現象の解明には適応できるとしても、実験が出来ない社会現象に適用することはできない。更にミルは、人々の諸観念からなる *realities* は、精神現象の諸法則、つまり観念連合の法則に規定されているという理解を、コントと異なり、捨て去ることが出来ない。そもそもミルの探求の起点、或いは思想的深化を生み出す道具となつたのは経験論の内省的空間であつたからである。そのため、社会現象の因果性の説明は、観念連合の法則からの演繹的推論過程を含むものでなければならなかつた。ミルは、その推論過程を含む、帰納的な社会科学方法論を別に考案しなければならなかつたのである。ミルがその方法に辿り着いたのは、一八三九年のことだ



あつた。そして三九年から四〇年にかけて第六巻の社会科学方法論が書き上げられ、『論理学体系』は完成に導かれた。では、この方法論の確立による現象の対象化を通じて、詩的想像にはどのような意義が与えられたのだろうか。

『論理学体系』でミルは、社会状態を「社会的な事実や現象の全ての共時的状態」と規定し、具体的に知的、道徳的状态、社会的関心、人々の趣向、美意識等々を挙げている。<sup>(42)</sup> ミルによれば、これらの要素は、他の要素から影響を殆ど受けないものと、逆に他の要素と相互规定的関係にあるものとに区別することができた。前者の要素を扱う科学をミルは、個別科学と置き、その方法として「物理的、具体的演繹法(the Physical or Concrete Deductive Method)」を挙げる。この方法は、最小要素に関わる基本法則から演繹して現象を規定する法則性を導き、それが現象から得られる経験則と一致することを確かめ、検証とするという方法である。他方、相互規定関係にある要素が生み出す現象の解明は、共時的な相互関係と、それらが次の歴史的発展段階に移行する動態的因果性の解明を総合して行われる。ミルはこれを社会の一般的科学(general science of society)と呼ぶ。そして、その方法として提示されたのが、「逆演繹的、歴史的手法(the Inverse Deductive or Historical Method)」であつた。ミルによれば、逆演繹法は、現象からそれを規定する経験法則を見出し、その経験法則を人間精神に関わる基本法則から演繹できるか否かを検証手段とする方法であつた。<sup>(43)</sup> ふたつの演繹法のうち、逆演繹法は、現象から経験則を導くことが先行作業とされている点で、帰納的側面を強く持つ。「ミシュレ論(一八四四)」でミルは、歴史研究の発展過程を三段階に整理し、第一段階では、「現在の感情と概念を過去に投影し、自分達の時代の生活様式の基準を引証基準として全ての時代、生活様式を判断する」<sup>(44)</sup> が、第二段階では「過去を現代の視点で見るとはなく、出来るかぎりその時代の視点から判断しようとする」ようになり、更に第三段階では、第二段階の成果を科学的な論理形式に掬い取る作業が行われると論じている。その際、過去の人々の考えや感情を掴む第二段階の歴史研究の作業では、詩人が發揮するのと類似した想像力が必要とされて

いる。そしてミルは、第三段階の歴史研究は今後達成されるべきものとした上で、ミシュレを第二段階の歴史家と見做し、ミシュレが市井の人々の心持ち、情熱、争い、成功と敗北に関心を持ち、それを詩的な想像力を用い再現したことに賛辞を送っている。また、過去の人々への同感的理解は、「コールリッジ論」(一八四〇)の一つの主題ともなっている。その論考でミルは、コールリッジの立論を一八世紀哲学と対照させ、一八世紀哲学が抽象的、形而上学的、散文的であったのに対して、コールリッジは、歴史的、具体的かつ詩的であると述べている。<sup>46</sup>つまり、ミルは詩的であることと歴史的であることを親和的であると理解し、歴史を理解するには、想像力を用い、感受性を豊かにし、その時代の観念形態、感情に同感しなければならぬと考えた。

こうして『論理学体系』の逆演繹法は、先ず、美意識を社会状態の一構成要素とし、例えば、夕日に照らされた雲の美しさを realities の一部を構成するものとして、実在化、対象化する。さらに、人々の諸観念から成る人間世界の realities を説明する作業は、それを客体化する前段階として、詩的想像力を用いて同感する過程を含む。例えば、都市の様態を分析することは、そこに流れる薄汚れた川、街中の雑踏、夜の静寂等々の中で人々が持つ考えや感情に同感することを起点としなければならない。三三年「ジュリウス・リヴィディヴスの著作」でミルは、推論能力を限界づけるべく、推論の諸前提や、探求の起点たる諸事実の提示、そして実現目的の設定を詩的感性と関わらせ、詩的感性を推論過程と相互補完的關係にあるものと置いていた。社会現象の探求において、詩的感性は、諸前提、諸事実を把握する不可欠の手段として位置付けられたのである。

【注】

(一) Andrew Pyle, ed., *Liberty Contemporary Responses to John Stuart Mill*, 1994.

- (2) *Collected Works*, Vol. 1, p. 157.
- (3) Courtney, W. L., *The Metaphysics of John Stuart Mill*, London, 1879, p. 42.
- (4) ミルが三〇年代前半ロマン主義に傾斜したことは、これまで多くの論者の関心を集めている。そして、その殆どの場合、ミルのロマン主義への傾斜と、合理主義、経験主義は、元来相反する異質なものと考えられてきた。その結果、例えば、「合理的人間が知的な改革作業に疲れた時の気分転換以上の役割を、ミルが芸術や想像力に与え得たかは疑問である」と論じられてしまうことになる(Anthony Arblaster, *The Rise and Decline of Western Liberalism*, Blackwell, 1984, p. 80)。本稿は、ミルの合理主義を最も顕著に示す「論理学体系」の成立過程で、ロマン主義との交渉が重要な役割を果たしたことを指摘する。尚、関口正司『自由と陶冶 J.S.ミルとマズデモクラシー』（みすず書房、1989年）では、「詩と論理学」という項目が設定され、三〇年代の詩論と論理学の探求が、事実認識と価値認識の峻別に繋がるといふ見解が示されている。その場合の事実認識と価値認識が、そもそもどのような構えを持つものと想定されているのか、やや掴みかねるという部分は残しつつも、本稿も、そこでの初期ミル解釈に基本的には異をとねえるものではない。
- 但し、価値と事実の弁別を、人間の内面と外界の区分に峻厳に対応させてしまうと、ともすると、人と人との内面を媒介するものが見失われ、内面的陶冶がどこまでも私的なものとなりかねない。その時には、内面的陶冶に含まれる公共精神の涵養は、せいぜい、他者と関わる物質的欲求の抑制に限定されてしまうのである。そして、そうした原子化された個人の内面美化が、外界の法則性の探求、人間の主体性観と繋がれるならば、人間の主体性が社会的に発揮される機会とは、法則性の知識を用いる物質的環境改善の領域、つまり生産の領域に限定されてしまう危険を孕む。仮にそこまで至るならば、政治の空間は生き生きとした活動の舞台ではなくなり、ミルを「自由主義的理性の皮肉」という文脈から救い出すことはできない。本稿は、三三年「詩とは何か」で示された内面と外界の区分けを、ミルがひとたび相対化している措置とし、それを経過したことで、ミルの思想がより広い射程を持つようになったことを示す。本稿の直接及ぶところではないが、そうした解釈を発展させるならば、ミルの政治思想はより懐の深いものと理解できるようになるだろう。尚、本稿は以下の拙稿の導入となるべきものである。「J.S.ミルの政治思想」*国家学会雑誌*105巻9、10号(92年)、106巻5、6号(93

年)

- (5) James Mill, *Analysis of the Phenomena of the Human Mind*, London, 2ed ed., 1878, p. 16.
- (6) *Collected Works*, Vol. 26, pp. 152-155.
- (7) 一八三一年一〇月のスターリング宛て書簡でミルは、「コールリッジ、ワーズワース等の作品に言及した後、現在は道徳、統治、法等についての諸原理の探求に勤しんでいることを伝え、「私に最も適していると思う唯一のことは、抽象的真理の探求です」と述べている(*Collected Works*, Vol. 12, pp. 78-79)」。このように、「ミルはロマン主義への関心を深めながらも、自然や社会を科学的に探求する姿勢を崩してはいなかった。
- (8) *Collected Works*, Vol. 18, p. 3, p. 13.
- (9) *Collected Works*, Vol. 12, p. 133.
- (10) 三三年の「詩とは何か」と「二種類の詩」は、五九年の『論議・論考』では、「詩とその様態についての論考」と改題され、併せて一編の論説とされている。書き表して三〇年余りの後は、大きな齟齬があるとは思われなかったようである。また、三三年七月五日のカーライル宛て書簡では、この詩論は全体は短いが、二部に分け、既に前半は世に示したと述べ、両者がそもそも一編のものとして予定されていたことを示唆している(*Collected Works*, Vol. 12, p. 162)。そのためもあり、従来の研究は、これらをロマン主義に最も偏った著作として一纏めと考えるか、或いは明晰でないと評価されている。しかしながら、先の書簡では引き続き、「書き始めたときに核心に達していない題材について今後書き表すことは決してしない積もり」であると述べ、「詩とは何か」は問題を十分に深く掘り下げたものではなく、「今はもう少し視野が開けていきますし、いずれ理解できることでしょう」と述べている(*ibid.*, p. 162)。またそれ以前にも、同じくカーライルに宛てた書簡で、「私はこの不思議な事柄の核心を完全に把握したとは、ますます思えなくなっています」と書き送り、「詩とは何か」への批評を求めている(33, 4/11, 12, *ibid.*, p. 149)。更に、「二種類の詩」が掲載された一〇月には、「二種類の詩」についで、「詩と芸術について以前書き表した考えを、より突き詰め、改良を施したもの」と書き送っている(33, 10/5, *ibid.*, p. 181)。

こうしたミルの記述、そして実際の詩論の内容から判断し、本稿は両者を変化の相から見ることにする。尚、三三年の詩論と、三五年の「テニソンの詩」に顕著な差異があることは以前から指摘されている(例えば、山下重一「J. S. ミルの思想形成」小峯書店、一九七一年)。

(11) Christopher C. R. Turk, *Colridge and Mill*, Avebury, 1988. 特に ch. 8 Mill on poetry.

(12) ミル自身はライオンを描写するという例を挙げ、科学者が体の構造や生活形態等を描くのに対して、詩人は、それを見たときに人間が感じる恐れ、おののきを想像的に表現すると述べている (*Collected Works*, Vol. 1, p. 347)。ミルによれば、博物学者が事実(truth)にしか関心を持たないのに対して、詩人は、喜び、恐れ、憐れみ等々、人間の感情のありように関心を持つのである。

(13) 三三年に書き改められた「経済学の定義」でミルは、「非常に複雑な衣装を纏う具体的な事実を見ていたのでは真理に到達することは」できないと論じている (*Collected Works*, Vol. 4, p. 329)。この時、ミルは reality と appearance を対照させ、外界についての reality (truth) は、自然科学的探求により把握することができると考えていた (*ibid.*, p. 335, 337)。とはいえ、「詩とは何か」にも、ロマン主義的な世界理解にひかれ、詩的感情世界になんらかの实在性を与えようとする記述がないわけではない。例えば、ミルは、詩的な絵画は「現実的モデルに倣うのでなく、ある観念(an idea)を表現しようとする」と述べ、ある種のプラトニズムに拠りながら、詩的世界にある实在性を与えようとしている (*Collected Works*, Vol. 1, p. 352)。とはいえ、他の行論では、この idea に対応するものではなく、立論の構えが鮮明ではない。また『論議・論考』に収録する際、ミル自身の手によりこの部分は削除されている。

(14) ミルが以前抱いていたと考えられる materialism に近い組立の認識論に従えば、自己と認識対象としての周囲の世界との感情的つながりは認められず、周囲の物、人は、いわばよそよそしいものとなる。直接の原因はともかくとして「精神の危機」の過程で、ミルは自分が手にした諸知識が陰鬱さを解消する手助けとなるどころか、むしろ助長するものと感じたはずである。『自伝』での記述によると、「精神の危機」はマルモンテルの小説を読んだことを契機に治癒したとあるが、周囲の世界との感情的交通が理論的に確かに基礎づけられなければ納得できる回復にはつながらないともいえる。実

際、ミルは、「憂鬱な状態になるといつも何か月も続いてしまい、殆どの場合、回復が遅い」と述べ、「精神の危機」に類似する精神状態に一度ならず陥っていることを示唆している(33, 4/11, 12 カライル宛て書簡, *Collected Works*, Vol. 12, p. 149)。

(15) 周囲の世界との感情的融和を目指すという位置付けで、ミルは「精神の危機」以降、ロマン主義理解を深めていた。そのため、自己と異なる考え方を理解しようとする姿勢は随所に見られる。例えば、三二年三月「スマート語義論概説」では、「他者の立場に立ち、その人の感じ方や考え方に同化する」と述べ、その感情や考えが自分のものといささかでも異なる」と一般的に非常に難しいものとなる」と述べている(*Collected Works*, Vol. 23, p. 426)。また、三二年五月の「政治用語の効用と弊害」では、精神諸科学の用語の曖昧性を明らかにする作業の目的は、「人々の言葉を介して人々の考えを知り、その人々の見方に従うことで、真理についての様な理解の仕方が可能であるかを確認すること」であると論じている(*Collected Works*, Vol. 18, p. 13)。更に、同年一〇月の「天分論」でも、「ある知識を持つ人と同じような心の状態に自分を置かねばならず、その人の考えを自分自身の考えとしなければならぬ」と述べている(*Collected Works*, Vol. 1, p. 331)。

それにも拘らず、三三年一月に、詩を独白と置いたことは、ロマン主義理解を媒介として、周囲の世界との感情的交通を再生するまでにはなっていないことが示している。この段階でのミルは、様々な経験を積む中で親密な世界を喪失し、自分に疎遠な様々な人々、事象があることに瞠目し、そうした人々や事象と何らかの関係性を定めたいと考えていたにとどまる。つまりこの段階でミルが手にしていたのは、世の中には色々な考え方をしている人がおり、自分がいつも正しいとは限らないという世間知に類似するものであった。極論すれば、この時のミルには、詩的世界は、行き場を失った自己の感情を慈しむためのものにすぎなかった。それを反映して、三二年の著作では想像力が果たす意義に注目されていない。よって、周囲の世界は疎遠なままにとどまり、ミルは、自己の同感能力の狭隘さを悲嘆し、その狭さが、「人と人との間の永遠の障壁となる」と嘆くことになる(33, 3/9, カライル宛て書簡, *Collected Works*, Vol. 12, p. 143)。

(16) *Collected Works*, Vol. 1, p. 375. ミルは推論能力を限定するために、推論の諸前提、探求の起点たるべき諸事実、望ま

- れる諸目的を、推論能力と相互補完的なものと置き、それらをいずれも詩的感情に関わらせようとする。目的と手段を、それぞれ詩的感性と推論能力に対応させる視座は、確かに、『論理学体系』の science と art の峻別を想起させる。しかし、その諸目的が、諸事実、諸前提と並列に置かれたことは、この時期のその峻別が、未だ不分明であったことを示唆している。ミルもそれを自覚してか、「このことは別の機会に、より詳細に論ずることになろう」と添えている (ibid., p. 376)。
- (17) Ibid., p. 376.
- (18) 既に「論理学の探求を進める過程で、三二年頃から、名辞の問題の背後に、名辞が代表する物 (things) の諸特性をいかに把握するかという問題があるとミルは考えるようになっていた (『政治用語の効用と弊害に関するルイースの所見』33, 4/22' Collected Works, Vol. 23, pp. 449-450)」。そういった問題空間が出来上がっていたことにより、この限界付けは一層容易なものとなる。
- (19) Collected Works, Vol. 1, p. 357.
- (20) Collected Works, Vol. 12, p. 162.
- (21) Collected Works, Vol. 7, p. 63.
- (22) Collected Works, Vol. 12, p. 163.
- (23) Collected Works, Vol. 12, p. 143.
- (24) この時期ミルが政治的事象への関心を失ったわけではもちろんない。ただ、ともすると、その関心から目を離し、「私は殆ど政治に興味を覚えなくなっています」などと漏らす状況にあった (Collected Works, Vol. 12, p. 145)。
- (25) Collected Works, Vol. 12, p. 163. 同様の趣旨のことは、既に一八三二年七月のカーライル宛て書簡にも見られる。そこでミルは、自分は芸術家よりも論理的な解釈者に向いているとしつつ、「芸術家の手によってのみ、真理 (truth) は人の心に残るようになる」が、論理的説明により、その真理を理解できるようにする作業も重要であると述べている (ibid., p. 113)。Truth と the truth (33, 7/5) という表現の微妙な差異はありながら、三二年と三三年にはほぼ同一の表現が用いられていることは『論理学体系』の執筆過程に関わり、重要な問題を孕んでいるが、その点の考察は次節に譲る。ただ、予め

指摘しておく、この時のミルは、ロマン主義への傾倒と、周囲の世界の論理的説明とを、矛盾を孕みつつ漠然とした見通しで行っていたにとどまる。よって、その状態を述べた、この三二年の書簡は、表現は類似するとしても、三三年の書簡とは、基本的な枠組みを異にする。

(26) *Ibid.*, p. 231. 尚、三三年九月の書簡では、「二種類の詩」を書き送ったことを伝えつつ、テニソンについて「同じ考え方で」よりよい書評が書けるとする旨を述べている (*ibid.*, p. 178)。しかし、実際の「テニソンの詩」は、必ずしも同じ考え方に従うものとはならなかった。

(27) *Collected Works*, Vol. 1, p. 413.

(28) 一連の詩論での論理の推移が、聯想心理学の観点から、どのような意義を持ち、またその後の立論にどのような痕跡を残したかを簡潔に確認しておく。

一般に聯想心理学では、個々の感覚 (*sensation*) は、残像として観念 (*idea*) を生み出し、その個々の単純な観念が、同時、継時の法則性に従い集合して複雑な観念となると措定される。そして、人間の認識活動は、その複雑観念により行われると理解された。例えば、薔薇という複雑観念 (類概念) は、香り、色、形状等についての単純観念が同時存在の法則により結合したものと説明された。そうした聯想心理学の立論に拠りながら、J・ミル『人間精神現象の分析』への注釈でミルは、日常、類概念である複雑観念が想起される際は、個々の具体的な個物が想起されるが、その個物の像は人、時代により異なるということに留意するよう求めている。つまり、諸観念の聯想形態には、個人的多様性と歴史的な多様性があることを認める。「馬」という複雑観念を例にとれば、人が馬を想起するときは、馬という類に共通する何かを想起するのではなく、個々の具体的な馬を想起する。結果的に、その像は個々の人間により異なることになる。つまり、その人が最近どのような馬を見たか、また「馬」に関してどのような趣味を持つかなどにより個々の人間が思い抱く馬は異なるのである (James Mill, *Analysis*, pp. 288-289)。或いは、荘厳な寺院に対して、建築家は設計図を思い浮かべ、敬虔な人は、厳かな感情を抱くならば、そうした差異は、寺院という複雑観念に対して両者が思い描く具体的個物が異なるために生じるのである。



三三年夏、「二種類の詩」を準備していたときミルは、周囲の世界の豊饒さに満たされ、その世界は、感情を媒介に擲めるものと考えていた。しかし、それでは、感情の流れに従い、世界の様相も変化してしまう。この『人間精神現象の分析』への注釈では、その流動性が人間の精神現象のありようとして、先ず論理的に説明されたのである。

しかし、だからといって、個人的、歴史的多様性が、動かし難いものとして容認されたともいいにくい。『論理学体系』でミルは、外界についてはその写像である諸観念以外の情報を持たないと繰り返し論じているが、幾つかの著作をみると、調和的な外界を想定していたと考えると説明しやすい場合が少なくないのである。例えば、父ミルは、『人間の精神現象の分析』で、単純観念を結合して複雑観念(類概念)とするのは、言葉の節約のためであり、その結合は恣意的なものであると理解していたが(ibid., p. 144, p. 260, etc.)、それに対して、ミルは複雑観念(類概念)の結合には、自然な形態があるとし、「類は自然に存在する現実なのであり、単に便宜的に区別したものではない」と論じる (*Collected Works*, Vol. 1, p. 229)。但し、もちろん、自分が今まさにそうした秩序の中に置かれているという強い実感を伴うものでもなく、またその秩序を *ought* の源泉とする論理構成がとられるわけではない。

(29) *Collected Works*, Vol. 1, p. 167.

(30) *Ibid.*, p. 215.

(31) *Ibid.*, p. 191, 215.

(32) *Collected Works*, Vol. 7, Textual Introduction pp. 55~65.

(33) *Collected Works*, Vol. 1, p. 167, p. 189.

(34) *Ibid.*, p. 189.

(35) 「経済学の定義」は、三一年秋に最初に著され、三三年夏に一部書き改められ、三六年一〇月に『ロンドン・ウェストミンスター評論』に掲載されている。本稿は、三三年夏を境として、ミルの思想に大きな転換があったと仮設する。その点で、三一年に書き著されたものが三三年のいつ頃、どのように書き改められたかに関心を持つが、残念ながら、三一年の原稿は明らかでない。そうしたことも手伝い、「経済学の定義」をミルの思想形成過程にどのように位置付けるかは難

しい。一般には、「経済学の定義」と『論理学体系』の関係は、その連続面が注目されることが多いが、本稿では、むしろ両者の差異に注目する。最も重要な差異は、両者が、人々の多様な諸観念を中心に構成される社会現象に対する方法論上の意義付けを異にしている点である。『論理学体系』の逆演繹法は、先ず現象から経験則を導くという実証主義的構えを持つが、「経済学の定義」での現象は、法則性を検証する手段の位置にとどまっている。この背景に、現象を起点とする帰納的探求がマコーリイの父ミル批判と等置されがちであったという事情があったことは勿論否定できない。この時ミルは、社会的事象の説明に関して、帰納的説明⇨実践(Practice)⇨保守的、演繹的説明⇨科学⇨改革的という枠にこだわっている。しかし、帰納的説明がすべからず保守的な議論を生む必然性はない。「経済学の定義」でのミルは、社会現象を厳密に解明する方法を確定することに性急なあまり、そうした枠を打ち破るに足る実在性を人々の多様な感情世界に与え得ていなかったのである。

(36) 三一年のスターリング宛て書簡からは、三一年にミルが『論理学体系』の準備に動しんでいることが窺える(*Collected Works*, Vol. 12, p. 78)。また三二年のカーライル宛て書簡にも論理学についての言及がある(*ibid.*, p. 113)。更に『自伝』では、『論理学体系』の前半部分は、類別論を除き、三二年にほぼ完成されていたと記されており、これらの書簡の記述に合致する(*Collected Works*, Vol. 1, p. 189)。更に、三二年の「政治用語の効用と濫用」は『論理学体系』の「名辞と命題」と構えを同じくしており、「名辞と命題」の草稿の大部が、三二年の時点でできていたと推測できる。こうしたことから判断し、三三、三四年の草稿のかなりの部分が、三三年以前に完成されていたと推測することも確かである。ここでの本稿の意図は次の通り。

- (1) 三三、三四年の草稿が存在し、かつ、三三年のカーライル宛て書簡から、論理学の探求が続けていることが推測される以上、三二年以降『論理学体系』の執筆は中断されたという『自伝』の記述は正確ではない。
- (2) 未分化な世界を確実な論理形式に拘い取ろうと考えるとき、名辞をいかに正確に定めるかは重要な問題となる。よってミルは、名辞の設定に新たな意義を見出し、すでに書き記してあった『論理学体系』の「名辞と命題」の部分に新たな視点から筆を入れたと推定される。三四年のカーライル宛て書簡で、ほぼ二年を隔てた「政治用語の効用と濫用」

（一八三二年）に言及し、それが、当時のミル自身の考えからのみ生まれたもので、「それまで私が著したもののなかで、最も忠実に私の考えを示したものである」と述べられているのは、この34年初頭にミルが名辞の分析に関心を寄せていたことを示唆している（*Collected Works*, Vol. 12, p. 205）。つまり、それまでの草稿に、具体的材料として多くのものが付け加わることは無かったとしても、三三年、ミルは新たな視点から論理学を捉え直し、それまでの草稿に手直しをしたのである。

- (37) *Collected Works*, Vol. 8, p. 994.  
 (38) *Collected Works*, Vol. 12, p. 205.  
 (39) *Ibid.*, p. 224.  
 (40) *Collected Works*, Vol. 18, p. 156.  
 (41) *Collected Works*, Vol. 1, p. 211. 『自伝』では「トックヴィル論」(I)でのトックヴィル理解は不十分であったと述べている (*ibid.*, p. 201)°。その不十分さは、『自伝』によれば、政治的信条の理解に関わるものであったとしているが、本稿では、それは方法論上の理解の不十分さとも関わっていたと解釈する。  
 (42) *Collected Works*, Vol. 8, pp. 911-912.  
 (43) ミルは、最小要素に関わる法則性からの推論過程を含むものを演繹と呼んでおり、現在、演繹法という際に一般に意味されるものとは少々異なっている。  
 (44) *Collected Works*, Vol. 20, p. 225.  
 (45) *Mill on Bentham and Coleridge*, ed. by F. R. Leavis, 1980, p. 108.

（ます のぶお・本学法学部専任講師）